

令和 3 年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果

杉江 和馬（奈良県立医科大学脳神経内科学）
泉 哲石（奈良県立医科大学脳神経内科学）
山川 勇（滋賀医科大学内科学講座脳神経内科）
大江田知子（国立病院機構宇多野病院臨床研究部）
豊岡 圭子（国立病院機構大阪刀根山医療センター脳神経内科）
狭間 敬憲（国立病院機構大阪南医療センター脳神経内科）
坂口 学（大阪急性期・総合医療センター脳神経内科）
三枝 隆博（大阪市立総合医療センター脳神経内科）
松本 理器（神戸大学大学院医学研究科脳神経内科）
河本 邦彦（国立病院機構兵庫中央病院脳神経内科）
河本 純子（関西医療大学神経病研究センター）
橋本 修二（藤田医科大学衛生学講座）

研究要旨

令和 3 年度の近畿地区スモン検診の検診総数は 54 名（男性 13 名、女性 41 名；平均年齢 81.9 歳）で、昨年に比べ 11 名減少し、検診率は 31%であった。検診方法は、大阪府、京都府では対面検診、滋賀県、和歌山県では電話検診、奈良県では郵便検診が多く、兵庫県では対面検診と電話検診が半数であり、昨年度に続いて各府県で多様であった。スモン検診者では感覚障害を主としたスモン後遺症が日常生活に大きな影響を及ぼしている実態が予想される。最近の近畿地区のスモン検診率は 3 割で推移しており、近年の社会情勢の変化においてスモン患者の現状を把握するために、参加が容易な検診形態を取り入れることも一つの有用な方法と考えられる。

A. 研究目的

令和 3 年度（2021 年度）の近畿地区スモン検診の結果から、近畿地区におけるスモン患者の現状を把握し、その課題を検討する。

B. 研究方法

令和 3 年度（2021 年度）の近畿地区スモン患者の現状を、各府県において実施した検診結果、スモン現状調査個人票、ADL および介護に関する現状調査から得られたデータを基にして解析し、その課題を検討した。スモン現状調査個人票における「検診形態」、「併発症」、「問題点と必要な対策の項目」では、全国

データと比較して各々の傾向を調査した。統計処理は Fisher の正確確率検定を用い、 $p < 0.05$ を有意とした。

C. 研究結果

令和 3 年度近畿地区のスモン検診の検診総数は 54 名（男性 13 名、女性 41 名）であり、昨年に比べ 11 名減少した。平均年齢は 81.9 歳であり、昨年に比べ 0.7 歳高齢化した。性別は女性が 78%を占め、昨年（77%）と同様の傾向であり、男性の平均年齢は 76.7 歳（昨年 80.0 歳）、女性は 83.3 歳（昨年 81.6 歳）で、男性は若年化、女性は高齢化した。府県別の検診者は、滋賀県（8→4 名）、大阪府（20→18 名）、兵庫県（15

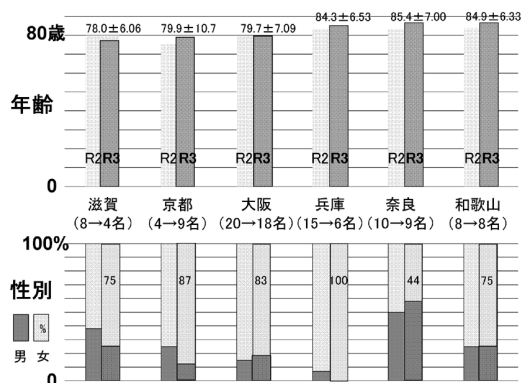


図1 検診者の年齢、性別 (近畿地区：府県別)

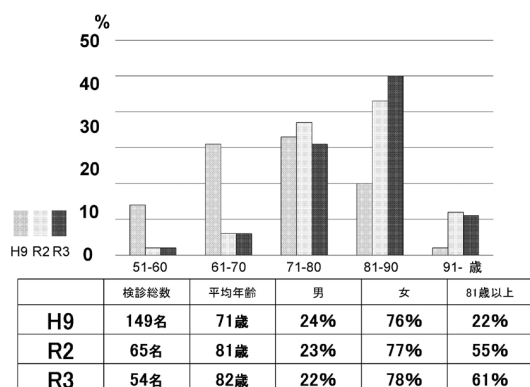


図2 検診者年齢分布の推移 (近畿地区)

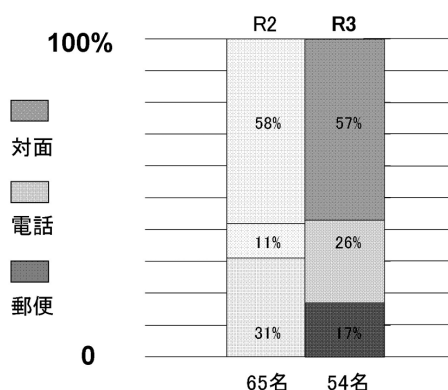


図3 検診方法 (近畿地区)

→6名)、奈良県 (10→8名) は減少、京都府 (4→9名) は増加、和歌山県 (10→10名) は同数であり、各府県で差が見られた。平均年齢は、滋賀県 (80.1→78.0歳) では若年化、京都府 (75.3→79.9歳)、兵庫県 (83.2→84.3歳)、奈良県 (83.2→85.4歳)、和歌山県 (83.9→84.9歳) では高齢化、大阪府 (79.7→79.7歳) は昨年と同じであった。性別は兵庫県で女性の割合が高く (100%)、奈良県で男性の割合が高い (66%) など各府県で差が見られた (図1)。検診者の年齢分布

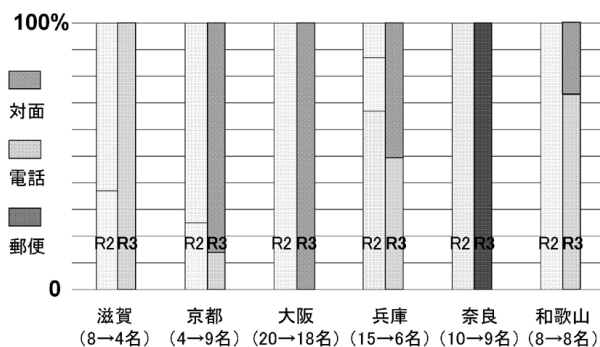


図4 検診方法 (近畿地区：府県別)

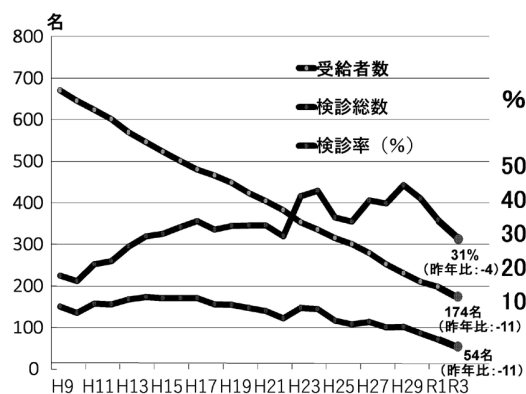


図5 受診者数と検診総数および率の推移 (近畿地区)

では、80歳以下の検診者は昨年より減少し、81歳以上では増加した。81歳以上は検診者の61% (昨年55%) を占めた (図2)。

検診方法は、対面検診は57%で昨年 (58%) と同様の傾向、電話検診は26%で昨年 (11%) より増加、郵便検診は17%で昨年 (31%) より減少した (図3)。府県別の検診方法は、大阪府は昨年に続き全例が対面検診、京都府 (75→89%)、兵庫県 (13→50%) は対面検診が増加した。電話検診は、滋賀県 (63→100%)、兵庫県 (20→50%)、和歌山県 (0→75%) で増加した。奈良県は昨年に続き全例が郵便検診で、各府県で検診形態に差が見られた (図4)。近畿地区の受給者数 (174名、昨年比：-11名) と検診総数 (54名、昨年比：-11名) は共に減少し、検診率 (31%、昨年比：-4%) も減少する傾向にあった (図5)。

スモン現状調査はいずれも昨年と同様の傾向で、BMIの平均は男性20.9、女性21.4、視力は「新聞細かい字」、歩行は「つかまり歩き」、外出は「介助で可」「近くまで可」、表在覚障害は「臍以下」「膝以下」、触

覚の程度は「中等度」、痛覚は「過敏」、末端優位性は「あり」、下肢振動覚障害は「中等度」、異常知覚は「中等度」がいずれも多数であった。異常知覚の内容は「びんびん、じりじり」が7割以上で、他の異常知覚も多い結果であった。自律神経症状では、尿失禁は「時々」「なし」、便失禁は「なし」、胃腸症状の程度は「軽いが気になる」が多数であり、その内容は便秘が多かったが、下痢もみられた。

身体的併発症は、脳血管障害は男性の割合が多く（15.4% vs 7.3% ; $p = 0.58$ ）、骨折（15.4% vs 26.8% ; $p = 0.49$ ）、四肢関節疾患（15.4% vs 41.5% ; $p = 0.31$ ）は女性の割合が多い傾向があり、昨年と同様の傾向であった。腫瘍性疾患（7.7% vs 24.4% ; $p = 0.26$ ）は昨年と同様に女性の割合が多かったが有意差はみられなかった。精神症候は、記憶力の低下（53.8% vs 19.5% ; $p = 0.03$ ）は男性が有意に多く、認知症（38.5% vs 14.6% ; $p = 0.11$ ）の割合も多かった。心気的（15.4% vs 24.4% ; $p = 0.71$ ）、抑うつ（7.7% vs 24.4% ; $p = 0.26$ ）は女性の割合が多かった。

日常生活動作および介護に関する現状調査は、介護申請は各府県で半数～4/5の検診者で申請されていた。Barthel Indexの平均は71.3であり、昨年（73.0）と比べてわずかに低下した。平均年齢が若年化した滋賀県（69.3→71.3）、同じであった大阪府（71.5→73.1）では上昇し、高齢化した京都府（80.0→79.4）、兵庫県（80.3→67.0）、奈良県（61.0→58.1）、和歌山県（82.5→74.4）では低下した（図6）。独居の割合は、大阪府（39%）、兵庫県（100%）、和歌山県（63%）で多い傾向にあり、入所者は6名（11%）であった。近畿地区

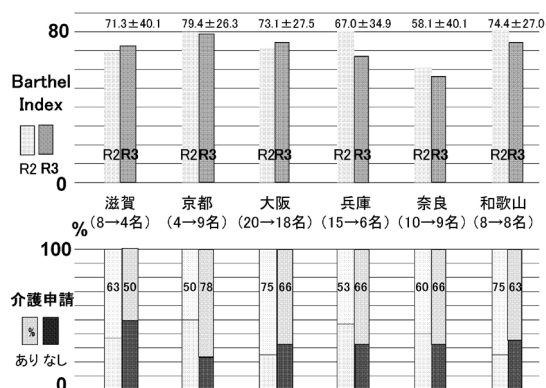


図6 日常生活動作と介護申請（近畿地区：府県別）

の独居総数（21名）と独居率（39%）は最近数年では共に減少傾向であった。

問題点と必要な対策の項目の自由記載欄は、京都府ではしびれ1名、症状の進行1名、経済的不安1名、将来の不安1名、大阪府では高齢化7名、歩行障害6名、しびれ4名、転倒・視力障害2名、症状悪化2名、独居4名、話し相手がいない1名、近親者の高齢化・病気1名、経済的負担2名、兵庫県では寝たきり1名、認知症1名、独居2名、経済的負担1名、和歌山県では高齢化1名、移動負担1名、認知症1名、独居1名、親戚が疎遠1名、ストレス1名挙げられた。奈良県では昨年同様に医療者についての要望が3名から挙げられた。滋賀県では指摘はみられなかった。

D. 考察

令和3年度の前記6府県のスモン検診者数は昨年に続き減少傾向にあった。検診方法は、大阪府、京都府では対面検診、滋賀県、和歌山県では電話検診、奈良県では郵便検診が多く、兵庫県では対面検診と電話検診が半数であり、各府県で多様であった。近年の検診者の高齢化に加えて、コロナ感染の影響も大きいと思われる。検診者数は、昨年は郵便検診が多い府県で増加していたが、今年度は対面検診が多い京都府で増加し、昨年とは異なる傾向があった。今後、患者の高齢化やコロナ市中感染の遷延などの社会情勢の変化により、さらなる検診形態の多様化が予想される。それぞれの検診形態にはメリット、デメリットを有するが、近年の社会情勢の変化においてスモン患者の現状を把握するためには、参加が容易な検診形態を取り入れる

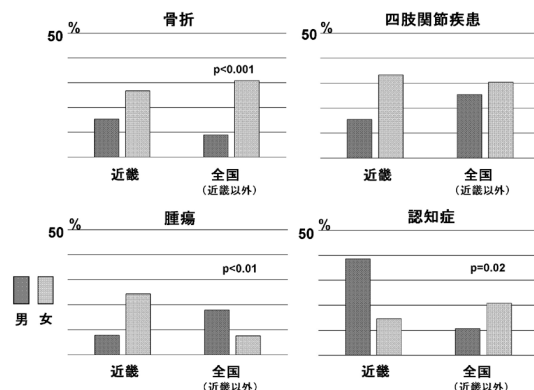


図7 併発症（近畿地区と全国の比較）

ことも一つの有用な方法と考えられる¹⁾。

身体的併発症は、近畿地区では骨折、四肢関節疾患が女性に多い傾向があった。近畿地区を除いた全国データ（図 7）でも、骨折（9.0% vs 30.8% ; $p < 0.001$ ）は女性が有意に多く、近畿地区と同様の傾向があった。過去の近畿地区におけるスモン患者の検診結果の検討においても、骨折の既往は 71 歳以上の約 1/3 を占めており、骨折経験者は女性に多かった²⁾。スモン患者の高齢化が進む状況において骨折予防の啓発が必要と考えられる¹⁾。腫瘍性疾患は、近畿地区では女性に多い傾向であったが、全国データでは男性が有意に多く（17.9% vs 7.8% ; $p < 0.01$ ）、近畿地区と異なる傾向であった。精神症候は、近畿地区では男性に記憶力の低下や認知症が多く、女性に心氣的、抑うつが多い傾向があった。全国データでは、認知症（10.7% vs 20.9% ; $p = 0.02$ ）は女性が有意に多く、記憶力の低下（28.6% vs 30.8% ; $p = 0.71$ ）、心氣的（15.2% vs 12.5% ; $p = 0.51$ ）、抑うつ（18.8% vs 18.3% ; $p = 0.89$ ）は明らかな性差がなく、近畿地区のデータと異なる傾向であった。

日常生活動作では、近畿地区のスモン検診者の今年度の Barthel Index の平均は 71.3 であり、昨年（73.0）と比べてわずかに低下した。平成 30 年度東北地区スモン検診結果³⁾の報告では、Barthel Index の平均は 70.3 であり、近畿地区と同様の傾向であった。スモン検診者の日常生活動作は徐々に低下しているが、Barthel Index の平均値は軽介助で日常生活が維持されている状況と考えられる。一方、在宅高齢者の ADL を調査した研究⁴⁾では、スモン検診でも用いられている自己記入式 Barthel Index で評価した結果、80-90 歳群の高齢者における平均値は 94.9 であった。この調査は政令指定都市で実施され、都市近郊地域の一般高齢者の実態と考えられる。スモン検診では入所者（近畿地区の今年度は 11.1%、東北地区の検討では 17.9%³⁾）も含まれるための直接の比較はできないが、スモン検診者では一般高齢者と比較して日常生活動作が制限されている状況が示唆され、スモンの後遺症が日常生活動作に大きな影響を与えていることが予想される。また、近畿地区の今年度のスモン検診率は 31% であり、検診に参加していない患者の実態が現れて

いない。在宅高齢者の ADL を調査した研究⁴⁾では、原則として調査員による家庭訪問により調査されているが、訪問を好まない対象者には郵送による手段も用いられている。スモン検診においても、スモン患者全体の状況を把握するために、郵送手段を用いた調査など、参加が容易な検診形態を取り入れることも一つの有用な方法と考えられる。

E. 結論

スモン検診者では一般高齢者と比較して日常生活動作が制限されていることが示唆され、感覚障害を主としたスモン後遺症が日常生活に大きな影響を及ぼしている実態が予想される。最近の近畿地区のスモン検診率は約 3 割であり、近年の社会情勢の変化においてスモン患者の現状を把握するため、参加が容易な検診形態を取り入れることも一つの有用な方法と考えられる。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 杉江和馬ら：令和 2 年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班・令和 2 年度総括・分担研究報告書 p 99-100, 2021
- 2) 小西哲郎ら：平成 26 年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班・平成 26 年度総括・分担研究報告書 p 63-66, 2015
- 3) 千田圭二ら：平成 30 年度東北地区スモン検診結果 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班・令和 2 年度総括・分担研究報告書 p 56-59, 2019
- 4) 千坂洋巳ら：無作為抽出法を用いて求めた在宅中高齢者の ADL 標準値 リハビリテーション医学 Vol. 37 No. 8 p 523-528, 2000